

# へきけんニュース

【ホームページ [https://www.hokkyodai.ac.jp/edu\\_center\\_remoteplace/](https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/)】

👉 へき地教育に関するオンデマンド研修ビデオ・資料・フォーラム等のお知らせなどが豊富に掲載されています！

✉ kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp

☎ 0154-44-3291 FAX 0154-44-3292



背景は北海道教育大学函館校

## へき地校体験実習でさらに教職意欲が高まるのは何故か 元々持っている学生の教職意欲は 子供との信頼関係と子供への教育的影響力でさらに発展する 教師の「深い学び」への教育実践的アプローチ

### 学生の小規模校の経験内容が語る「教職の学びの実感」

昨年度、「へき地校体験実習」について、①授業実践②児童生徒理解③学校の組織運営④地域との連携を実習を振り返る視点として設定し、参加学生にアンケート調査を行い、その集約をまとめました。（※1）それぞれ、項目によつての数的な差異はあるものの「へき地実習」が多くの学生にとって「深い学び」につながったとの回答を得ています。またそれぞれの項目について「自由記述」を設定し、率直な感想を書いてもらいました。



元教職大学院教授  
津田 順二

### 個々の子どもの実態に応じた授業づくりの重要性の気づき

具体例の一つとして、「授業づくり」について見ていくと、「小規模校は一人一人の特性に沿った授業づくりができることが魅力だと感じた。個人の苦手な分野をいかに伸ばしたり、克服させる授業はどのようにすればいいかを考えるのが楽しかった。」「子どもの実態に合わせて授業をつくっていく難しさ、個別指導の難しさについて実感することができた。」（実習Ⅰ）「間接指導で早く終わった児童が暇な時間を作らないよう少し多い程度のプリントなどを用意し、1時間いっぱい時間を有効に使えるようにすることを学んだ。」（実習ⅡⅢ）などの記述がありました。（※2）

### わたり・ずらしの貴重な経験が、赴任地の現場で活かした！

また、「へき地実習」を体験した卒業生（現教員）からのアンケートにも、「複式学級の『わたり、ずらし』など実際に見ることができたため、現在勤めている学校でもイメージできた。現在の管内はこの先どんどん複式学級が当たり前となってくると思うので、授業中のことなどで工夫するべき点について参考にできると思う。」などの回答もありました。

## 「複式授業」から発展的に学んだこと、基本は「一人一人の子どもに寄り添うことだ」

「へき地実習」の大きな特徴は、実習を行う学校がへき地にあり、学校規模が小さいことです。当然ながら児童生徒数も少なく、学級単位で見ると複式学級は当然ですし、学年が1人だったり、2～3人の学級だったり、極小という場合さえあります。また複式学級が隣接する学年でなく、2年生と4年生のような場合もあります。そこでの実習は、授業実習（教壇実習ともいわれていますが）が、2学年を同時に進行させる授業設計の難しさを伴います。

単式授業における教材研究、資料の準備なども、少人数とはいえ2学年の用意が必要です。しかも、直接指導する学年と、間接指導（教師がつかないでの学習）の学年があることから、学習のどこを、どのような内容でどのくらいの時間で等、授業運営の緻密な設計が必要となるのです。

### 学習形態の新しい考え方を採り入れる必要性を感じた複式授業

しかし、先に上げた「授業実習」の自由記述では「わたりやずらしの難しさを感じた。」「45分で2学年分教えるので間接指導の際に児童にどんな活動をさせるのか考えるのに苦労しました。」などの困難さも書かれていましたが、多くは「学習の形態、個別指導の重要性について学べた。特に、学級経営の在り方が授業に影響することを実感した。」や「個別指導の重要性に改めて気づくことができた。」「授業の見通しを持たせることやワークシートの作り方、使い方など間接指導における児童の学びを支援する手立てについて学びを深めることができた。」など、複式授業の実践研究によって「一人一人の子どもたちにとってどうなのか」という授業の基本に立ちかえって思索したことが記述されています。



### 授業にも個別指導を採り入れることの重要性



顕著なのは「授業づくり」にあたって「児童一人一人を見てあげること」「個別指導の重要性」「個に応じた支援が多くなり、それをしっかりしなければならない」など、授業づくりの基本として児童・生徒の実態を的確に把握することの重要性が挙げられていることです。授業設計としての出発点が指導方法や指導の技術ではなく、個別指導の緻密さや児童生徒の実態をつかむことという点です。

## 全職員で地域とともに子どもたちを支える

子どもの姿から出発するその発想は、「授業づくり」に限りません。“児童生徒理解”では「子どもと一緒に悩んだり考えたりすることが大切であると学んだ。」「どんなことも子どもと一緒に活動する教師の姿の姿が印象に残っている。」更に、“学校の組織運営”では「職員室での会話の内容の多くが児童についてだった。児童が成長していることに喜びを感じていたとともに、学校全体で児童一人一人を多面的に見ていることが分かった。」との記述もありました。

## 地域との連携活動も子どもの発達全体に生かすへき地校の取組み

「地域との連携」についての学びとしても、地域の方々の積極的な学校への協力体制ができており、運動会などの学校行事や地域の方々との体験学習が、そうした協力の上で実施されていることが多く記述されています。併せて日々の教育活動にも多くの支援の様子が記述されていました。



## 「小さい学校・少ない子ども」だからこそ「学びは深く、重い」

へき地校体験実習の利点として一般に次のことが言われています。

- ・へき地の教育や地域の現状を直接体験することで、学生の価値観や意識を転換し、へき地教育に対する理解や関心を深めることができる。
- ・へき地校実習は、へき地小規模校での複式学級指導や地域連携などの教育活動を見て学ぶことで、市街地大規模校での教育活動にも応用できる新しい教育観や指導方法を習得することができる。

## 大規模校の実習でも発想の方法を応用できた！

参加学生アンケート、自由記述に示された内容の多くは、いわゆる大規模での実習ではできないというものではありません。また、授業実践については大規模校での実習の方がはるかに多くの回数を経験することができるものと思います。

## 教師相互の協働的な学び合いを学ぶ

実習の大きな柱が「教職とは何か、どうあるべきか」を学ぶことだとすれば、「へき地実習」での学びは、より濃密で深いものといえるのではないかと考えられます。児童生徒と教師、教師相互の協働的な関係が濃密なのは、実習現場のスケールの小ささに拠るものだと思います。

## 一人一人の実態に応じた指導の在り方を学ぶことができる！

実習生の自由記述にある内容が、「授業づくり」はじめ様々な教職の基盤ともいえる点に触れるのは、学校のシステムや機能を把握すると同時に一人一人の子どもの実態に目を向けた実習となっているからです。学校規模、児童生徒数のスケールの小ささからくる必然とも言えますが、スケールが小さいからこそ子ども一人一人の実態把握の細かさや的確さが求められます。そしてそれが授業においても活かすという経験をするようになるのです。これは子どもを見る視点にもかかわってきます。

## 子どものことを話題にできる極小規模校のアウトホームな職員室！

職員室での教師同士の会話に、児童とその家庭や兄弟についての話題が上ったり、教職員全体で一人の児童の状況を交流したり、体験学習の地域の協力状況を報告したりする、そうした中にも実習生は子どもの実態をつかむ方法と内容を把握し、「一人一人を生かす」ためにはどうすべきかを深く検討することになるのです。

## 個々の指導を考え続けること、教師間で学びあうことに実習の成果があった

へき地実習は学校が小規模であることから、“学校運営などでの細かな発見”や“子ども一人一人と向き合うこと”を可能にします。けれど、微細であればあるほど課題も生じて来ます。授業の展開にしても「間接指導はあれでよかったのか」「教材のポイントはあれでよかったのだろうか」や、“児童生徒理解”でも「全校遊びの方法はあれでいいのだろうか」など、決して一様でない、同じスタートラインに立っているのでもない子どもたち。だからこそ教育実践の基本に立ち返り思索をめぐらし実践し反省し課題を見つけていくというサイクルを身につけるという意味での「へき地実習」の意義は大きなものがあります。

### 共同生活も教師の資質に向けた学び合い

更に付け加えて、実習に当たっては特別の場合を除いて、実習期間、複数の学生の共同生活(※3)によって実施しています。互いの実習での学びの情報共有とともに具体的な実践の交流も学びを確かなものにする役割を果たすといえます。授業、学校行事の運営など具体的な方法のみならずその意味についても交流する中で実習が漠然とした筋道ではない教職へのイメージを確立します。

### 学校組織運営の一員として考えてもらえるへき地校体験実習

展望として「へき地実習」がさらに拡大することを願っています。より具体的に、「教職とは」「教師の仕事」を学校組織運営の中の一員に近い眼差しで体験できると考えます。その体験は学校の規模の違いを超えて「子どもとどう向き合うか」「どう教えるのか」など教師としての意志が問われる体験となるものと思います。



※1 (令和4年「教師の育成」～地域協働型教員養成教育の挑戦～Ⅱ北海道教育大学釧路校の地域協働型教員養成教育プログラムの特色-第2章3)

※2 へき地実習Ⅰは二年生対象、へき地実習Ⅱ・Ⅲは三年生以上

※3 へき地実習の宿泊は空いている教員住宅を利用させていただいたり、地域会館等を利用させていただいている。近隣にない場合は特別に民間施設を準備する場合もある。